

知られざるナミビア

今泉 浩和

(18-1, ナミビア, 理数科教師, 新城市立作手中学校)

「それでは皆さん宜しくお願いします。」(拍手)

「ナミビアという言葉もね、ちょっと聞き慣れない言葉ではありますが、日本ではもちろん、私自身もあまり知らなかったのが事実なのであります。日本に帰ってみると、ナミビアの番組がTVによく出て、ナミビアに行ってきたから、意識しているのかどうか分からないのですけども、年末に見ていた番組でも、お笑い芸人のイモトがチーターと走っているシーン。あれは、すごかったですね。色々なところでちょっとずつ知られていくようになってきたのかな、と思います。今日の私の発表の中で、ナミビアという国がなぜ知られていないのか。そして、どんな国なのか、といった紹介を交えながら、私の活動を発表させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

(ナミビアの国家が流れる)

今、流しているのはナミビアの国家です。非常にゴスペル風な、三部合唱となっております。向こうの学校にいきまして、朝礼で三部の合唱をするのを聞いてすごく驚きました。とても、綺麗な合唱でした。

それでは、ナミビアへの初めての隊員ということで、もちろん先輩もいませんし、今日ここでナミビアの話を、日本初に聞けるということで(会場笑う)、皆さんは、今、その会場に居合わせているということで、幸せかなと。なお、内容の方はあまり堅くないようにしますので、それが私のカラーですので、よろしくお願いします。

その前に、なぜ私が協力隊に参加したのかといいますと、その背景は大学時代にさかのぼります。卒業後ケニアに派遣された一つ上の先輩の影響を受けています。私もそういうところにいつてみたいなと思い、それは大学の3年の時でした。私の場合、卒業後、急ぐように結婚、そして、教員としてのスタートをきってしまいましたので、いつしか夢も忘れかけていました。今、全然関係ないのですが、ナミビアクイズですので、お楽しみください(会場笑う)。そんなとき、現職教員特別参加制度というのがございまして、「お、これは!」と思ひまして、私の心に火がつかしました。「やめなくてもいける」と。私の子供もですね、手が離れる年になってきまして、半分シニアに足を突っ込んだ年になってきましたので、若き日の夢に向かって突き進みました。応募したのは理数系教師です。ナミビアは選んだわけではありませんが、新しい国なので派遣前からとてもわくわくしていました。でも、先輩隊員がいるわけでもありませんでしたし、前情報が入らなかったのも、正直不安もいっぱいありました。ナミビアってどんな国なんだろうって思って、自分で色々調べてみました。JICAのホームページにも、外務省のホームページにも基礎情報しかのってな

くて、ほとんど生活情報はのっておりませんでした。

ナミビアってどこにあるの？って、派遣が決まった時に地図上で探しまして、(関係なく流れているナミビアクイズのスライドを見て)話がそれちゃうんですが、これが、伝統料理のマハングというものでして、とうもろこしが主食になっています。伝統料理です。

ナミビアがどこにあるのかという話ですが、アフリカ大陸がかなり大きいのですが、そのアフリカ大陸のかなり南のほうでして、赤道からこんなに離れたところにあります。それから日本と比較する意味で、日本の地図を出してみます。そうすると、このぐらいの大きさの違いがあります。ナミビアの国の大きさは、日本の大きさの約2倍もあります。こんな広い国土なのに、人口はたったの210万人。日本でいう、一つの県にも満たないくらいです。出生率は、日本の三倍もあるのに、人口が増えていきません。原因は、国土の半分以上が砂漠。人が、物理的に住めないのと、それからエイズの問題が拍車をかけているようです。就学率は、78%だそうです。私が、向こうで生活していた実感ではですね、いわゆる裸で生活している裸族を抜かせば、ほぼ100%に近いと思います。高校3年生までが義務教育になっていまして、お金があまりかからないように、国の政策がしっかりしています。

ナミビアの特徴といえばですね、数百万年間その姿を変えていないというナミブ砂漠です。世界で最も古いとされています。鉄分の酸化が進んでいるので、赤い砂漠としても有名です。その美しさは他に類を見ません。サバンナに忽然と姿を現す砂丘群はですね、その高さは約300メートルです。もう圧巻です。それから、太平洋側は、ベンガル海流が乾いた冷たい空気をもってくるので、海の上の空気も湿らないので、砂漠が海岸までせまっています。世界でたった一か所だそうです、砂漠と海が隣接する不思議な光景です。でも、少ないながら降水量はありますので、そういったところは、サバンナ気候になるので、壮大な、そして、広大な草原が広がっているのです。それから、国全体としても年間の平均降水量が300ミリ以下で、高い植物は育たずに、サボテンやアロエ、ヤシなどが主に育ちます。河川域以外に森林はほとんどありません。ナミビアは、そういうジャングルはないんですけども、サバンナで生きる野生種は豊富です。ゾウなどの、たくさんの草食動物がいます。肉食動物はほとんど捕獲されてですね、広大な保護区で管理されています。(スライドのライオンを見て)ちょっと、撮るのが怖かったですけれども。ナミビア南部の海岸ではですね、南極の方のイルカとか、それからアザラシ、ペンギンもみられまして、最初はアフリカなのにペンギン？とびっくりしました。それだけ、実は寒いんですね。アフリカなのにすごく寒かったです。冬の時期は、氷点下までいきますので、生徒たちもコートを着て登校してました。夏は暑いんですよ。

南アフリカ依存型の資本経済をベースに1990年に独立という新生国家のナミビアはですね、数あるアフリカ諸国の中では先進的に発展してします。部族紛争もなく、平和で明るい国でした。ほとんど、国際ニュースに取り上げられたことがなかったので、日本からはあまり知られていないのだと思います。古くはドイツの支配下に置かれていたので、地

名にはたくさんのドイツ語が使われています。「なんとかフォンテン」とか、首都のヴィン
ドックとか、アルファベットだけ読んでも全然読めないんです。ドイツ語なのですね。植
民地支配の目的というのは、ダイヤモンドやウラン、金。豊富な鉱物資源です。資源大国
といえるナミビアは、アフリカ諸国の中では GNP が第 5 位だそうです。統治されたときに
乾燥に強いヨーロッパ牛が持ち込まれて、もともとここにいた牛ではない別のものの、ヨ
ーロッパ牛が持ち込まれて牧畜がおこなわれました。それで、ソーセージだとか、ビール、
それにワインなどの醸造技術が伝わって、今もなお健在です。それから、大西洋は非常に
冷たくてですね、日本でもよくとれるタラとか、カニとか、エビとかがたくさんとれて、
そういう水産資源が豊富な国です。ただ、生では食べませんので、日本とは違い、とった
ら全部冷凍されてしまいます。その後は、イギリスに支配が変わって、ナミビアには 2 本
の大きな川が流れているんですけれども、1000 キロもの距離をパイプで結んでしまっ
てですね、イギリスの技術でですね。大水道工事をしたために、上水技術はアフリカーと
いわれています。(スライドを見て)こんな風に、砂漠の中に街を作ってしまったんですね。
首都に関しては、下水を上水に変えるというリサイクル技術を導入している唯一の街なの
で、水不足という砂漠の国として悩んできたからこそ、水に関しては最先端の技術が投じ
られているのだなと思いました。日本が地震に対する高度な技術を持っているように、ナ
ミビアは水に関して高度な技術を持っているのです。ナミビアには、およそ 20 以上の部族
が存在するといわれています。主な民族としては、ブッシュマンが有名なのですが、あの
ニカウさんは、ナミビア出身です。ちょっと古いですけどね。農耕民族としては、ヘレロ
族とか、ヒンバ族とかが、河川流域に点在していて、その一つ一つの部族同士が会話がで
きないほど異なった言語をもっていました。でも、イギリスの長い統治で、英語が公用語
化して、混血のカラードも生まれ、たくさんの民族性をもった国家になっていきました。

知られざる国、ナミビアの紹介はこれぐらいにして、私の活動を紹介したいと思います。
私の赴任先はですね、首都から北へ 700 キロくらい離れていて、非常に遠いですよ、オ
ンダングアという小さな町です。アパルトヘイトの影響を大きくうけていて、黒人層への
教育の遅れが目立つことをうけて、日本からの派遣が決まりました。約 2 万人が暮らすこ
の町にある唯一の高校で、物理化学の教師として勤めることになりました。アンディバ、
トイボ、ヤ、トイボ高校というんですけれども、ちょっと長いので、アンディバ高校でい
いですね。どんな暮らしをしていたのかというと、首都のようなビルとかまったくなくて
ですね、私のいた北部では、平屋だてのサバンナ地帯です。土もなく、全部が砂です。非
常にさらさらとした、綺麗な砂です。月明かりの照らす夜は、雪と間違えるほど白いです。
学校の校庭ももちろん砂です。仕事にはネクタイ姿ですね。イギリスのボランティアの方
もいました。着るものには苦勞しませんでした。そして、洗濯物の乾くスピードには驚き
ました。1 時間あれば完全に乾きます。タオルなどは、日差しのせいで、すぐにごわごわ
になり、それには苦勞しました。あかぎれにも、苦勞しました。それだけ、空気が乾燥し
ているのです。最初は、クーラーも扇風機もなしでがんばっていたら、全身あせもになっ

てしまいました。しかたなく、扇風機だけ買って、クリームを塗って治しました。その土地の風土を知る必要性に気付きました。

食事に関しては、ソーセージとか、ハム、パンとか、パスタが中心でした。ナミビアがドイツに占領されてよかったなと思う瞬間でした(会場笑う)。ソーセージがとてもおいしかったのを思い出します。日本みたいに惣菜のパンはないのですが、パン自体がおいしいのです。私自身、自炊の経験がなかったものですから、栄養面にはとても気をつかい、必ず数品入れるようにしていました。食後には、必ずフルーツを食べていました。乾燥した地域なので、農作物がとれないので、大半が輸入品でした。乳製品や、肉、卵以外はほとんどが輸入品だった気がします。私から見て、そこに暮らす人たちは、農作物が高いと思わないのかなと思ったのですが、豊かな国なので、大丈夫みたいです。スーパーまでいけば何でも手に入るので、時々日本食が食べたいときは、現地でも調達できる食材で日本食に挑戦しました。ちらし寿司とかね、赤飯とか、天ぷらとかですね。料理の腕は格段に上がりました。味噌汁とかにも、色々挑戦しました。本当にいろんな食材が売っていました。気をつけていたのは、念のために一度水は沸かしてから使うことでした。一緒に赴任した他の隊員たちは、水をガバガバ飲んでいたらしいのですが、それでもどうってことはないらしいです。日本よりも、水は安全だったと思います。私は念のために煮沸をしました。レストランのない町だったので、バランスのとれたメニューを考えていました。向こうには、日本に勝るほどのビールもありました。

私の家ついてですが、女子寮の管理棟に住んでいました。部屋はわりときれいでした。キッチンには4つ口コンロが支給されて、料理がしやすかったです。見た目はきれいにみえますが、主にゴキブリとの共同生活でした。ペットボトルに水をいれて、断水対策をしていました。この生活に欠かせないのが、充電式の蛍光灯です。水道と電気はたまに止まるので、週末の夜は大変でした。つらかったのは、断水とか停電でした。停電は一日あれば回復するのですが、断水は三週間くらい続きました。幸い水場が近かったので、幸いでしたが、それでも水の貴重さを痛感しました。5、6月は、気温が一桁台まで下がるのですが、お湯は出ないので、冷たいシャワーを浴びてました。雨は、あまり降りませんが、降った時は基本的に雨漏りでした。家の構造が、そういう風になっていないのです。

あえて買わなかったものとして、家事家電。不便な生活を体験してみたかったのですが、やっぱり不便でした。現地の人ほとんどが持っているテレビも買いませんでした。日本人だからといって、金持ちにみられたくなかったんですね。見たい番組は、近くの家に行ってみせてもらうことで、自然と親睦も深まりました。インターネットも引きませんでした。今では、ナミビアも無線でできるようになったらしいのですが、当時は電話回線しかありませんでしたので、学校の回線も利用させてもらってました。

さて、一番肝心の職(仕事)です。私が勤務しましたアンディバ高校は北部最大の高校で、生徒数は1000人を超えてました。数十キロという遠くから来ている人もいることもあって、生徒の7割が、700人以上が寮生活をしていました。寮費はとても安くて、三学期制なので

すが、一学期で、約 1200 円です。一日三食ついていきます。この学校には、伝統的にサイエンスクラブというのがありまして、毎年地区予選を勝ち抜くのですけれども…。全国大会まであるので、私も全力で支援しまして、その結果、最も倍率の高い化学部門で、全国 3 位を勝ち取ることができました。ほとんどの賞を総なめにしていたのは、都市部の私立高校でした。特に、白人層なののですけれども、北部の黒人層からの入賞は大きな夢を与えたようです。

もうひとつ、私が意欲的に取り組んだのは、成績処理の電算化です。パソコンが生徒用に 30 台あったので、授業のサポートに回りました。教師用には 4 台ありまして、生徒名簿だとか、成績管理、処理のアドバイスをしました。現地の教員だけで進めていけるように、マニュアル化をしたり、若い先生を集めて、成績処理委員会というのを組織しました。これまでテスト後一週間かかっていた成績処理が、たった 2 日で終わって、通知表を配るまでできるようになって、現地の人達だけで運営できるようになってきて、大変感謝されました。

イギリスの教育制度をそのまま持ち込んだナミビアは、既に学校評価とか、日本も行われている教員評価制度とか、あるいは、授業研究のためのワークショップだとかセミナーが組織的にもう行われていました。これには最初びっくりしました。他の国ではこういったことを隊員が働きかけたり、立ち上げたりするといった事例を聞いていたからです。質を問わなければ、システムは出来上がっている国なんですよ。初代隊員としては驚くばかりでした。このセミナーに関しては、何の手立ても加えることができませんでした。

苦労したのは、やっぱり、専門用語との戦いですね。高校 3 年生の授業を中心にみただけですけれども、小学校や中学校で習う化学・物理の知識、そういう専門的な英単語をすべてを知っておく必要があります。最初の一年は本当に戦いでした。生徒に配りたいプリントが自由に印刷できないというのは非常に苦勞しました。印刷のおばちゃんという人がいてね、それは彼女の仕事なんですからね、頼まないといけないんです。頼んだのにプリントが必要なときにできあがってないというのが、そんなことがしゅっちゅうです。機嫌を損ねると、アウトです。最終手段は合鍵を使いました。それから、会議と名の付くものはとにかくいつ始まるか分かりません。3 時からだよ、っていつても、始まるのは 5 時過ぎで、しかも 3 時間ぐらい続きます。効率のいい日本の会議と比べちゃうと、非常にストレスが溜まりました。

それでは、百聞は一見にしかずです。学校のようなすをちょっとだけビデオで紹介します。
(学校の日ようすのビデオを流す：1 分半)

(スライドで)

私の担当クラスは 1 2 C。

2008 年 12 月に卒業試験が終わりました。

毎年の合格率はおよそ60%。結果はどうだったのかな？まもなく新聞発表されます。
2008年11月応援メッセージを送りました。交流は今も続いています。

(ビデオメッセージ：1分半)

まず最初に、まもなく高校卒業おめでとうございます。

卒業試験でいい結果が残せることを祈っています。

私は前の学校に戻り、4月から復帰しています。

一方、タカノリ先生は教員採用試験に合格しました。とてもうれしいです。

私が残したメッセージを覚えていますか？もう一度、贈りますね。

「あきらめなければ 夢はいつか叶う」

ではまた。

ご静聴ありがとうございました。